第１回長久手市立地適正化計画策定委員会　議事録

議　事　概　要	
会議の名称	第１回長久手市立地適正化計画策定委員会
開催日時	令和４年１２月２日(金)午前９時～午前１１時まで
開催場所	ながくてエコハウス多目的室
出席委員	【学識経験のある者】 松本幸正、武田美恵、吉村輝彦、中居楓子 【交通事業者】 児玉朋孝、大野淳 【市内商工関係者】 伊藤広治 【市内福祉団体】 鈴木聖美 【オブザーバー】 木村昌博、堤清（代理：安藤彰祥）
事務局出席者	【事務局】建設部長 水野、同部次長 矢野、同部開発調整監 吉田 都市計画課長 吉田、都市計画課課長補佐 山崎、同課主任 日比野、同課主事 寺島
傍聴者人数	１人
会議の公開・非公開	公開
審議の概要	・立地適正化計画の策定方針について ・策定スケジュールについて ・上位計画及び現況の整理について ・その他　都市運営について
問　合　先	長久手市建設部都市計画課　内線３２４

１　あいさつ

建設部　水野部長より挨拶

２　立地適正化計画の策定方針について

意見なし

３　策定スケジュールについて

意見なし

4　上位計画及び現況の整理について

（委員長）

現段階の事務局による現況整理を踏まえた、「対応が求められる将来の情勢変化」、「都市構造上の課題の整理」ということだが、まだ内容は固まっていない。より良いものに、また長久手市らしいものにしていくために、委員の皆様からは様々な御意見をいただければと思う。

（委員）

質問だが、資料「長久手市における現況及び都市構造上の課題の整理」一番下の「都市構造上の課題の整理」で、右から二つ目の課題、「■土地区画整理事業により整備された地域における高齢化を踏まえた施設の維持・更新」の中の、高齢化などの人口動向を踏まえた都市施設の維持・更新とは、具体的にどのようなことを考えているのか。維持・更新とは、縮小の方向性も含んでいるのか。

（事務局）

今後、高齢化が予想される中で、必要な機能の変化を捉えつつ、誰もが安全に安心して利用できるように、バリアフリー化等の検討をしていく必要があるという意味である。

（委員）

機能面で考慮していくということであり、高齢化に伴い利用者が減るため縮小するという意味合いではないということか。

（事務局）

今後、利用者の高齢化、減少が予測されるため、単純に今ある施設をそのまま更新するのではなく、さらに誰もが使いやすいように施設を維持・更新し、長久手市に住みたいと思っていただけるようなまちづくりをしていきたいと考えている。その過程で、必要であれば縮小についても検討していく必要があると考えている。

（委員）

視点として、少子化の進行に対する考察があまりされてないのではないか。

資料「長久手市における現況及び都市構造上の課題の整理」の「現況整理　⑴人口」に核家族化の進行については、資料「上位関連計画の整理・都市構造上の課題」P13 を見ると、世帯当たり人口が、1970 年は 4.1、2020 年には 2.3 に減少している。これは、昔の家族構成は親、子、孫、の 3 世代が多かったと思うが、親から子が離れて暮らし、子が離れて孫を作ることで核家族化が進行しているのだと思われる。

また、世帯あたり人口が 4.1 から 2.3 への減少は少子化の進行ということも読み取れると思う。以前は子供が一家族に 2 人だったが、昨今は出生率が 1.1 に減少しており、核家族化の進行と共に、少子化の進行が含まれていると考えられる。高齢化の進行及び少子化の進行といった点にも着目すると、新たな対応が必要になるのではないか。

（事務局）
　検討する。

（委員長）
　日本全国で見ると、この長久手市というのは非常に特別な状況である。若年層の人口が増加しており、平均年齢も全国で一番若い。その状況を伸ばすための立地適正化計画は、やはりあるべきだと思う。
　「現況整理」と現況整理を踏まえた「対応が求められる将来の情勢変化」、そして、「対応が求められる将来の情勢変化」に対応する「都市構造上の課題の整理」が整理されているが、「子育て」については記載がない。しかし、長久手市においては、「子育て」が重要だと思われる、子育て世代への対応こそ長久手市らしく記載出来る点であると思うため、少子化の現状を捉えつつ、「子育て」がしやすいまちについて記載すると良い。立地適正化計画で目指すコンパクトなまちは、家のすぐそばに遊べる公園がある、また、郊外へ行くと自然が豊かであるなど、まさに「子育て」がしやすいまちであると思う。
　マクロな少子化の流れには抗えないが、他の自治体に比べると子育て世代への対応について検討出来ると思う。
　現状を整理するとともに、「子育て」がしやすいコンパクトなまち、歩いて暮らせるまちなどを課題に含めると良いのではないか。良い点を伸ばすという視点もぜひ持って欲しい。

（委員）
　資料「上位関連計画の整理・都市構造上の課題」P15 の「図：5 歳階級別人口（2040（令和 22）年）」では、20 歳から 24 歳人口が突出している。これは、現在、長久手市で生まれ育っている、または転入者が成長したことが要因であれば、住み続けられるまちを目指した方が良い。この世代の方々が就職に伴って、長久手市外に出てしまうことがないよう、「長久手市は良い」、「住み続けたい」、「子育てをしたい」となるまちを目指すと良いと思う。

（事務局）
　大変貴重な御意見ありがたく思う。
　現在、育っている子供たちが、一旦は巣立っていくかもしれないが、また長久手市が住みやすいまちだということで戻っていただける、そんなまちづくりをしていきたいと思う。

（委員長）
　大学の進学を機に長久手市から出ていき、そのまま東京や大阪、名古屋といった都心から帰ってこないことが多いが、進学後も戻り、住んでくれる環境を作っていくことはとても大事な視点である。難しいかもしれないが、東京に勝つぐらいの気持ちを持って進めていただきたい。

（委員）
　課題の捉え方は、今直面している課題という意味での捉え方もあるが、目指すべき姿を描いた際に、どういう課題が設定できるのかという意味での捉え方もあるのではないか。今ここにある情勢変化は、ネガティブな要素が多いと思うが、むしろ、それ以外のポジティブな要素について

考えても良いのではないかと思う。

現在、ライフスタイルが変化する中で働き方も変わってきており、通勤通学のあり方も変わってくるかもしれない。また、ライフスタイルや働き方を選ぶ際には、コンパクトなまちであることが利便性につながり、選ばれることがあると思う。その意味では、DX や自動運転などを含めた将来の情勢変化と考えると、資料では高齢者を強調しているが、むしろ子育て世代や若い世代への対応をもう少し前面に出しても良いのではないか。

まだわからない領域の一つだが、ジブリパークも含め、より生活環境が良くなった時にどのように人口が変化するのか、その観点から捉えた時に何が言えるのか、どのように考えられるのかということを、ネガティブな意味での情勢変化だけではなく、ポジティブな変化の中で考えなければならない。

また、立地適正化計画を作るだけではなく、いかに使っていくかということが、暮らしと直結すると思うが、暮らしている人がまちを使いこなしていくという視点についても積極的に検討していくことが重要である。

それは都市構造の問題だけではなく、小さなイベントや社会実験などが行いやすいなど、長久手市らしさをもっと皆さんと一緒に探求できれば良いと思う。

一般的な立地適正化計画を長久手市で作るのは面白くないと思っており、長久手市が今いる位置でこの先を見通したときに、こういうことを目指すのだから、こういう立地適正化計画を作っていこう、という意思をもっと出しても良いのではないか。一般的な立地適正化計画の長久手市版ではなく、より長久手市らしい計画を検討しても良いのではないかと思う。

ポジティブな要素から捉え直したときに、何か記載できることがあるのではないかと思っている。

（事務局）

今直面している課題を見据えた場合、ネガティブな要素が多くなりがちだが、委員の皆様がおっしゃるように、長久手市らしい若いまち等の特色を、さらに盛り上げ、若い人を呼び込み、もっと若いまちにしていくなど、ポジティブ要素、プラス要素を踏まえ、長久手市版立地適正化計画を作っていけたらと考えている。

引き続き検討をしていくため、御意見をお願いしたい。

（委員）

立地適正化計画であるため、よりコンパクトに、うまく重ね合わせていくことが大事なのだと思う。

（委員長）

情勢変化は未確定、不透明な部分があるが、モビリティの革命や DX の進展、或いはライフスタイルの変化等があるため、どのような形で記述できるか検討いただきながら、そのような時代に選ばれるまちを長久手市は目指していくということだと思う。

もう少し広域で見ると、名古屋駅とダイレクトに繋がっているのは長久手市の特徴である。栄にもすぐに行ける。そういった立地の中で、すぐそばにはすばらしい公園もあり、豊かな自然もある中で、コンパクトであり、そういう時代に選ばれていくんだという将来を描ける。そのよう

な将来を描けるまちは多くないため、ぜひ記載した方が良いというのが御指摘であると思う。
また、まちを「使いこなす」という考え方を、この立地適正化計画の中に記載していくことができると良い。
長久手市らしさという意味で、まちを「使いこなし」ながら、住みやすいまちにしていくこと、そして「使いこなす」施設、空間がまちの中にコンパクトにある。それが、未来の若い世代から支持されるライフスタイルである、というようなストーリーが描けると良いと思った。

（委員）
資料「上位関連計画の整理・都市構造上の課題」P47（6）道路・交通・移動について、リニモ沿線には、愛知工業大学をはじめ多くの大学、高校が立地している。学生が住みやすいまちということは長久手市の特徴でもあるため、立地適正化計画の中で学生がどのように公共交通等を利用しているかという現況整理をすることで、新たな課題が見えてくるかもしれないため、検討すると良い。

（委員長）
大学生という視点での現況は、どこかで整理しているか。

（事務局）
大学生という視点ではないが、資料「上位関連計画の整理・都市構造上の課題」P54 の「図：駅端末交通手段内訳（出勤・登校）」、P56「図：交通目的別代表交通手段内訳（登校）」で、最寄駅までどのような手段で来ているのか整理している。

（委員長）
大学の立地状況はないのか。

（事務局）
大学の立地状況は資料の中で整理していない。

（委員長）
では大学の立地状況を整理していただき、可能であれば、下宿の割合など、情報公開されているデータを収集しながら、長久手市内の大学に名古屋市内から通っているのか、長久手市内から通っているのか、長久手市内から通うのであれば、その大学生が長久手市の中で便利に生活できているかどうか、調査した上で、大学生という視点で記載があっても良いのではないか。

（事務局）
調査可能であれば検討したい。

（委員長）
限られるデータだが、その中で何か見えるものがあれば整理すれば良い。リニモの利用でいうと、通学定期の利用者数が公表されており、そのようなデータもこの現況整理に使えると思う。

（委員）

瀬戸の商工会にも所属しており、先月、愛知工業大学の学生たちと、瀬戸のまちづくりについての討論会をさせていただいた。これからの未来のまちづくりについての考え方や必要なものは、我々50代60代が考えるものと20代が考えるものでは大きく違うため、私たちが考えるまちづくりを討論することも必要であるが、20年後30年後の未来を支える若者たちの趣味嗜好や考え方に基づく討論も非常に大切だと思う。

若者たちがこれから社会に出ていく上で、働く場や活躍する場、活動できる場、必要とされる場をどのように配置するかということと、そこでどのような人たちを巻き込んで構成していくのかということを検討しながら考えるまちというのも、すごく魅力的だと感じたため、何か明るいもの、想像できないものを一つ取り入れる考え方も必要ではないかと思う。

（事務局）

来年度市民ワークショップを行う予定をしている。その中で、学生の方にも参加していただきながら、生の声を聞いていきたいと考える。

（委員長）

市民ワークショップや地域懇談会等の開催は、長久手市における計画策定では、重要である。そこで若い人、子育て世代の方に参加いただけるよう工夫し、様々な世代の意見が集まるようお願いしたい。

（委員）

歩いて暮らせる、歩いて便利な生活を送るということが文字で記載されており、それは理解できるが、若い人も含めた人々の「生活シーン」や「暮らしのイメージ」等を明確にしていくことがこれからの見せ方として必要ではないかと思う。

コロナ禍に策定された市町の都市計画マスタープランは、コロナ禍以前の都市計画マスタープランから変化している印象を持つ。「自分たちが何かすることができる舞台がある」、「自分たちにとって居心地のいい場所がある」といった内容が記述されるようになっており、合わせて、それを活動シーンや使いこなすシーンとともに描くことで自分にとってまちでこんなことができるんだとイメージしやすい見せ方となっている。

そうなると、堅い言葉ではあるが、立地適正化計画に位置づける、区域、施設もそのような場所になっていくのではないかと感じており、シーンを踏まえた、長久手市らしい立地適正化計画として探求しても良いのではないかと思う。一般的な立地適正化計画にこだわらず、若い人たちが関わりやすく、高齢者の方にとってもイメージしやすい見せ方の工夫をすることで、より自分たちの住んでいるまちに対して関わり方の変化や愛着形成に繋がっていくのではないかと思う。そのため、今の御意見は改めて大事だと感じる。

（委員長）

素晴らしいと思う。若い世代とのワークショップなどができると良いと思う。私の授業では、学生にまちの課題を抽出し、その解決策を提案して、場合によっては図面にし、パワーポイントで説明するような従来通りの形で行っていたが、最近の学生は映像を使う。まちが変わるとこん

な生活ができるということを、彼らに映像で作ってもらう、まさにそれがシーンだと思う。
立地適正化計画によって出来上がっていくまち、或いは具体的に歩いて暮らせるまちでは、どのような生活が送れるのかということを、言葉だけではなく、わかりやすく、よりリアル感のある表現を検討した上で、見せ方を工夫すると良い。

（委員）
行政が検討する計画では、空間・建物だけを変えるイメージパースの提示という見せ方が多いかもしれないが、少なくとも、人々がその空間・建物でどのように過ごしているのか、使っているのかというイメージを提示している見せ方も増えてきている。従来のようにインフラがこのように整備されますという提示だけではない見せ方にシフトせざるを得なくなっていると感じている。

（委員長）
色々な技術があり、人々がにぎわっている様子やイベントをやっている様子を空間で作成できるようになっている。コンピューター上で作成できるため、そのようなイメージを見せてもらうと、将来がイメージしやすくなり良いのかもしれない。

（委員）
長久手市の災害リスクは、関わってきた他市町では見たことないほどハザードリスクが低く、そういった点は強みだと思う。災害リスクに関して、比較的安全であるという記載は難しいかもしれないが、他自治体に比べハザードリスクが低いという強みをうまく活かした計画にできないかと考えており、立地適正化計画と関係ないかもしれないが、ハザードリスクの高い地域と協定を結び応援できるようなことを検討するなど、強みを生かした記載も出てくると良いと思う。

（事務局）
ハザードリスクが低いことは強みとして考えられる点ではあるが、自治体として対応を検討する必要はある。強みを活かしてハザードリスクの高い地域と協定を結び、場合によっては、災害時に本市が避難者の受け入れをするといったことも想定できるのではないかというご意見だと思うが、本日防災部局が同席していないため、後ほど情報共有の上、検討する。

（委員長）
強みを伸ばすことは大事であり、その強みがさらに伸びるような立地適正化計画という方向性も検討が必要だと思う。広域の防災連携についても、望まれていることだと思うが、立地適正化計画での記載は難しそうである。一方で、都市機能として、災害時の災害対応拠点になりうる施設が長久手市内に整備されていることは十分考えられるため、防災部局と相談した上で、災害対応拠点を誘導施設等、立地適正化計画に記載できる可能性もあると思う。

（オブザーバー）
長久手市はほとんど浸水の被害想定がされていないが、愛知県内では尾張西部の浸水被害想定は甚大である。そういった意味では、リスクに対処する対策が他よりも軽く済むが、対策の検討

は必要である。
　ハード面、ソフト面の双方の対策から防災指針の検討を進めることになると思われるが、うまく組み合わせた防災指針を策定することが強みになると思う。
　立地適正化計画の策定主体は、市町村であり、市町村の独自性や意思が非常に発揮されるものであり、長久手市らしさは出すべきであり、出さないと意味がないと思っている。
　長久手市らしさを出すにあたり、課題の捉え方として、一つは是正すべき課題、もう一つは強みを伸ばすための課題があるはずなので、それらを市民から見てもわかりやすいよう整理することで、おのずと長久手市らしさも整理されるのではないか。長久手市らしさを打ち出して、新しい立地適正化計画を見せていただきたい。

（事務局）
　強みを伸ばすための課題を整理していくことで、長久手市らしい立地適正化計画となるイメージができた。強みを伸ばすことで、長久手市が選ばれるまちとなる計画を策定することが大事だと感じたため引き続き検討する。

（委員長）
　庁内関係部局の課長級職員による、策定部会が設置されているが、若い職員だけで検討する機会があっても良いのではないかと思う。正式な位置付けではない、サブ部会等で若い職員により長久手市の将来や、立地適正化計画に関して話し合うことで、若い職員たちの意見を取り入れることが出来ると思う。

（委員）
　防災に関して、東海豪雨の時代は、長久手市東部に多くある水田に水が回り浸水被害を防いだという話も記憶にある。災害対策としての農地の活用やその必要性、農地は都市を形成する上で重要な一部であることを認識した上で進めていただきたいと考える。

（委員長）
　都市計画マスタープランの方で、市街化調整区域の農地の保全については明確に記載されている。
　他市町では農地をダムのように活用し、大雨が降った時に水田で水を溜めるという実験を始めるところがあった。そういう農地の活用が広がれば良い。今まで以上に水田に水を貯められる技術も出てきつつある。

（委員）
　社会福祉協議会は、高齢者を対象とする相談窓口や、障害や難病を持って暮らしづらさがある方の相談をお受けする場所であり、コミュニティソーシャルワーカーは、様々な理由による暮らしづらさある方たちをはじめ、人の暮らしに近いところでお仕事させていただいている。この立地適正化計画の策定が進む中で、策定されることで、日々おつき合いする人々の暮らしがどうなるのかということを想像しながら参加させていただいている。
　日々の相談で話題に上がるのは、東小学校区付近の宅地開発されたエリアにおける移動の難し

さについてである。特に、高齢になり身体機能が低下された方が、勾配を下り、公共交通機関を使い、荷物を抱えたまま坂を上り家に帰るということが、日々の暮らしの中ではとても暮らしづらく、長久手市は住みよいまちだと思い転入したが、実際に自分の暮らしが具体的になってみて、初めてわかった暮らしづらさだと聞いている。

特に今、移動の困難がきっかけとなり、高齢者身体機能がさらに低下し、介護医療の依存度が高まる懸念があるため、包括支援センターやコミュニティソーシャルワーカーを中心に、社会に出ていく、参加するための環境整備に関わらざるを得ないと考えている。

また、子育て世代が多い町であるという話題があったが、長久手市内には、子供に直接働きかけるような、子供自身が自分の足で通えて参加ができるような社会資源がとても少ないと相談員たちは感じている。特に、引きこもりと言われるような状態にある方たちの参加支援を目標に取り組んでいるが、場所があっても、その先に愛着や、ここが自分の居場所であるといった思いや、過去にそこで過ごした記憶のようなものがないと参加しづらく、そこを自分の居場所だとは感じにくいのだと考えている。

そのため、この先の長久手市で生まれ育った子供たちが、大人になった時にもう一度長久手市を生活の場所として選ぶ機会があったときに、長久手市を選ぶかどうかは子供時代の居場所、居場所での過ごし方に影響しているのだと思う。

（委員長）

大変重要なご指摘だと思う。立地適正化計画は基本的に市街化区域内での対応を検討することになるが、今の御意見は市街化区域内でも同じように求められることだと思う。高齢者が、足腰が弱った時にも社会に参加できるような環境ができていること、子供たちが小さな時から自分の家のそばに自分で行ける居場所があり、成長の過程でそこには全然振り向かなくなっても、ある程度大きくなったらまたその居場所に帰っていけるという空間があることが大事である。

そのためには、歩いていける場所に集える空間があり、アクセスするために歩道や自転車道も整備されており、高齢者のシニアカーや子供たちの自転車、ベビーカーを押しながら行ける空間ができたら本当に素晴らしい。

まずは市街化区域内に、立地適正化計画の中でそんな空間をつくりながら、郊外部に関しては別の方策として進めていけば良いのではないか。そんな生活ができるまちになると良い。

（事務局）

本市の立地適正化計画では、歩いて暮らしやすいまちづくりの実現に向けて検討している。

移動困難な方が、どのような問題を抱えているのか、その背景を踏まえた上で、歩いて暮らせるまちについて、市民ワークショップを行い、この計画の中に落とし込んでいきたいと思う。

また皆様の御意見、御協力いただきながら、歩いて暮らせるまちについて考えていきたいと思っている

（委員長）

将来的に人口減少に転じるが、同時に核家族化で１世帯あたりの人口が減っているため、世帯数は増加している。世帯数が増加することで住宅の立地が増えるため、郊外へ広がってしまうことは大きな問題である。そのため、今後の世帯数予測も見ながら、住宅の立地をどう考えていく

のか整理すると良い。

また、歩道の整備状況が整理されていないが、歩いて暮らすには歩道がしっかりと繋がっており、主要な施設へ面的に広がっていることが基本だと思う。歩道の整備状況を確認した上で、策定時には意識しておく必要がある。

資料「上位関連計画の整理・都市構造上の課題」P34 の「図：商業施設の分布状況（2022（令和 4）年）について、大型店舗から徒歩圏 800 メートル以内とした場合、市街化区域内の一部が徒歩圏から外れているという説明であった。しかし、大型店舗として日用品を取り扱う大型商業施設を含んでいるため、生鮮食品に絞り、生活者目線にたって徒歩圏から外れているか検討すべき。

また、市民の意識に関する情報がなく、そもそも市民がどう感じているのか、この市街化区域内において、何を便利で何を不便と感じているのかという点を捉えておいても良いと思う。長久手市では何年かに 1 度は市民意識調査をしていると思うので、それを整理すれば良い。地区別の評価を整理した方が、マクロな指標として良い指標になりうるため、ぜひお願いする。

また、低炭素について、長久手市としての取り組みや、カーボンニュートラルについてはどう考えているのか。

（事務局）

本市はゼロカーボンシティ宣言をしており、それに向けて各部署で取り組んでいる。公園西駅土地区画整理事業において低炭素まちづくりを進めてきたが、その他の区域にどうのように展開していくか、また、計画の中でどのように位置づけていくのかも課題だと考えるため、引き続き検討する。

（委員長）

世界的な流れを踏まえると、さらにカーボンニュートラルを強く打ち出してくることが考えられるため、「対応が求められる将来の情勢変化」には入れたほうが良い。

立地適正化計画で目指す、コンパクトで歩いて暮らせるまちづくりは、カーボンニュートラルに繋がる施策であり、都市構造上の課題に繋がっていくため検討が必要である。

（委員）

道路渋滞や歩道、自転車が走りやすい環境など、道路整備についても計画の中で整理できると良い。

（委員長）

住宅地等の通過交通を排除し無駄な車を入れないことが考えられる。そのためには、幹線道路の渋滞対策、整備が必要であり、カーボンニュートラルにも関係するため、検討、調査すると良い。

多くの御意見、御指摘をいただいた。データの取得の限界等もあるが必要と思われる点を、可能な範囲で反映いただければと思う。

5　その他　都市運営について

（委員長）

都市計画マスタープランの中では、市民協働によるまちづくりを推進していくことが記載され、実際に計画に沿って取り組みも始まっている。そのような中で、立地適正化計画を策定するにあたり、市民の意見は取り入れていくが、そのあとの具体的な施策、取り組みとしてどのように市民協働を位置づけることが可能かという点について御意見いただければと思う。

（委員）

市民という言葉が含む範囲はどういうものなのか。事業者を指すのか、行政以外はすべて市民と考えるのか。

（事務局）

そこで活動される団体や、長久手市内の事業者等を含んだ長久手市に関わる行政以外の方を広く捉え、市民と考える。

（委員）

都市計画マスタープランにこのような方針の記載があるのは、愛知県内でもほとんど事例がなく、長久手市らしさの一つだと思っている。

立地適正化計画の中での空間や、拠点や施設を整備していく、或いは現在あるものを利活用し、様々な人たちにとっての場所にしていくためには、空間を作るだけではなく、それを動かしていくために応援できるようなことを計画の中に位置づけていくことが、市民協働の後押しになるのではないか。

都市計画マスタープランに記載した結果、長久手中央２号公園での活動が始まっているように、計画があることの意味は、絵にかいた餅としての計画ではなく、様々なことが動きだすきっかけになることではないか。

補足説明になるが、長久手中央２号公園周辺には、公園や緑道、さらにその先にリニモテラス公益施設、リニモの路線上の駅前などがあり、管理主体は様々な団体、部局である。しかし、エリアとして見れば一体的と捉えられるものであるため、個別に進めるより庁内連携や様々な団体、民間事業者も含めて、一緒に進めることを考えていくために、計画での位置づけが有効であった。

また、上位計画に則す、関連計画と整合させることは前提であり、大事なのは何かアクションを起こしたときに、各課を跨いで一緒に進められるような体制や、若手の横の繋がりを活用し一緒に進められるようになるために、上位・関連計画を活用すべき。そうすることで、より様々なことに対してアクションが生まれるのではないかと思う。

（委員長）

「空間等の使い方を市民と一緒に考えて作っていく」ことを立地適正化計画に記載するということだが、おもしろい立地適正化計画だと思う。具体の施策として書くのか、章立てして記載するのかについては、工夫しながら長久手市らしく策定出来ると良い。

関係部署が一緒に取り組む具体的なアクションのために上位・関連計画を活用することは、具体的に進めていく中で、実現できる体制を作っていくということだと思う。

（委員）

ボランティアや、奉仕活動というような形での市民協働によるまちづくりは綺麗だと思うが、継続していくための仕組みが必要だと考える。まちづくりに事業者が継続的に参加するためには、利益循環があってのことであり、事業を繰り返し継続する上では、資金が確保できるような状況で進めていく必要がある。

主たるメンバー、主たる必要経費が確保できるような状況で活動を開始することが、継続的な事業となるためには必須ではないか。

商工会には、様々な業種の団体が加盟しているため、多種多様な役割を担うことは可能だが、継続的に事業を続けるためには、各団体のメリットになる部分をしっかりと見せる必要がある。

（委員長）

ご意見の通りだと思う。

ボランティアは美しいが継続性という課題がある。補助金として資金を投入する方法も続かない。

そうではなく、参加者にもメリットがあり、そして、市にとってもメリットがあるという仕組みを考えていかないといけない。

最近そのような仕組みが増えてきている。例えば、公共空間を使用して営業する代わりに売り上げの一部を管理費として徴収する、地産地消でエネルギーを使いながら、そのエネルギー売買するなど様々な仕組みができてきている。そのような仕組みを考えていくと良いのではないか。

また、そのような仕組みに資する施設を都市機能誘導施設に位置づけるということがあっても良いと考える。

（オブザーバー）

ジブリパークを整備し、ジブリパークのある愛知ということで、色々な人が来訪することに期待をしつつ、地域の方に対しては、渋滞対策等への対応が必要であると考える。

（委員長）

引き続き委員の皆様にはご協力いただき、市としても引き続き検討いただければと思う。

以上